

2026年1月19日

— 点数で命を選ぶ時代に、医療は何を守るのか —



1月18日の日本経済新聞に、静かではありますが、非常に重い問いを投げかける記事が掲載されていました。

「DNA 点数で産む子を選ぶ？」

見出しは疑問形ですが、この問いはすでに現実の入口に立っています。

体外受精によって得られた複数の受精卵について、遺伝情報から病気のなりやすさを数値化し、より「望ましい」とされる受精卵を選択する。これは遺伝子を編集するわけではありません。しかし、命を点数化し、順位をつけるという発想そのものが、医療の風景を確実に変え始めています。

この技術の中心にあるのが、ポリジェニック・リスクスコア（PRS）です。多数の遺伝子情報を統計的にまとめ、将来の病気リスクを確率として示す手法です。一見すると、極めて科学的で合理的な判断材料のように見えます。

しかし、ここには見過ごせない課題があります。PRS は未来を確定させるものではありません

ません。計算方法が変われば結果も変わり、解析に用いる集団が異なれば、予測の精度も揺らぎます。それでも数値として示された瞬間、人はそれを「答え」として受け取ってしまいます。

点数は中立に見えます。しかし、何を測り、何を重視するかを決めているのは人間です。どの病気のリスクを重く見るのか。身長や知能といった形質を評価に含めるのか。「より良い」とは何を意味するのか。そこには、科学の装いをまとった価値判断が、静かに入り込んでいます。

医療はいま、ある境界線に立たされています。それは、予防医療と優生思想の境界です。

「選べるのであれば、より良い選択をしたい」その思い自体は、親として自然な感情でしょう。

しかし、その選択が積み重なったとき、社会は次のような問いを発し始めます。

——選べたのに、なぜ選ばなかったのか。

——そのリスクは、自己責任ではないのか。

かつて優生学は、国家や思想の名のもとに語られてきました。しかし現在は、そうではありません。市場、善意、そして「科学的な数字」が、それを静かに運んでいます。だからこそ、より見えにくく、より抗いにくいのです。

医療は、未来を設計するための営みではありません。医療の使命は、どのような未来であっても、人に寄り添い続けることです。確率によって命をふるいにかけることではありません。点数は、命を説明することはできません。しかし、命の価値を決める権利は、点数にもアルゴリズムにもありません。

この技術をどのように用いるのか。あるいは、どこで用いないと決めるのか。その判断と責任が、いま静かに私たち医療者に委ねられています。

私たちは、未来を最適化するために医療をしているわけではありません。不確かな未来を生きる人に、寄り添うために医療をしているからです。